

中原中也没後50年祭



青春の思い語る



講演する大岡昇平氏
＝山口市の市民会館大ホールで

山口市を訪ねたら、中原中也
された「碑前祭」など。

(一九〇七―三七)のテレホン
カードが売られ、本屋には「中
也コーナー」があった。いまど
き、こういう叙情詩人がどれだ
けらけているかについては、い
る見方があるだろうが、少
なことも郷里で、いま注目を浴
びていることは確かである。

「これが私の故里だ／さやか
に風も吹いてる／(略)あ、
おまへはなにをして来たのだ
と……」吹き来る風が私に云
ふ」

この絶唱から半世紀余りた
ち、薄幸の詩人・中也は、いま
郷里で没後五十年祭をもって迎
えられている。

地元各種団体を中心となっ
て実行委員会をつくり、山口市
及び市教育委員会との共催で、
記念行事がもたれたのである。
原稿・日記・書簡・写真の類を
展示した「特別展」(一月30日
まで、山口市歴史民俗資料館)
や、生家に近い山口市湯田の高
田公園にある中世詩碑の前で催
喜へ、悲しむよりは喜べ、とい

大岡昇平氏が友情の歌声

「若き日」求め甘さと優しさ

「中也詩の生と
歌」と題する講
演では、大岡氏
が車いすで登場
したのには驚かされた。聞けは
その朝宿で立ちくらみを起
し、転んで腰を打ち、動けなく
なってしまった、という。いざ
さか生氣のない風情だったが、
話すことは明晰(めいせき)
で、若き日の友への友情にあふ
れるものだった。

「悲しい時には泣けばいい、
うれしい時には喜べばいい、と
中原は主張し、とにかく人間は
喜べ、悲しむよりは喜べ、とい

うのが願いだっただけ……」
大岡氏は、中也に抱ける叙情
の特徵を語った。
「詩には思想をうたう詩もあ
るが、中原は詩の特徵はへ叙
情であるとして一生通した。
ものを感動したら、それを
うたった。そして、そのうたの
領域は広く、ただうたうだけ
なく、多彩な音が聞こえてくる
ようなものだった。詩の中から
声が出てくる。だから多く
の人に読まれた。悲しい人も、
こころがポルテになります」と

注釈を交えたものの、一向に
「強く」ならないので、聴衆か
らは笑いももれたこともあつ
た。
「幾時代かがありました」茶
色の戦争がありました」で始まる
「サーカス」には「ゆあーん
ゆよーん ゆやゆよん」という
不思議な言葉が繰り返される。
ここでも大岡氏は「このリフレ
インはこういう意味か。サーカ
ス小屋をゆるがす風の音とか、
いろいろ考えられます」といっ
て、しみじみと歌った。

「七十七歳の老人が、こんな
へんなうたを歌って聴かせるの
も、昔の友人に対する熱心さか
らのものなので……」と、大岡
氏みずから解説する一幕もあつ
たが、中也に関

して、律義な大
岡氏がどれだけ
のこころを込めて
たかにうたう
は、いまさら断るまでもない。
近年の岩波文庫版『中原中也詩
集』や角川書店版『中原中也全
集』などの編集だけを考へても
大変な労苦だったわけである。
その他に評伝もある。

かつて三島由紀夫はいみじく
も書いたものだ。
「大岡さんの中原中也や富
永太郎氏の評伝の仕事には、異
様な情熱が感じられる。そこに
はもちろん大岡さんの青春が賭
けられてゐるのだが、自分の文

「大岡氏の、一失われた時」
を求める仕事は、いかにいわれ
ぬ「甘さ」と「優しさ」を伴う
のはそのせいに違いない。
福島氏は「中也絶叫コンサ
ート」と銘打ったもので、中也
詩をモチーフにした短歌をピア
ノ、尺八、パーカッションなど
を伴奏し、文字どおりの「絶叫」
するの朗読・朗唱だ。「中
原の内部の声を取り出して振
張する」(大岡氏)が、しばし
は朗唱は激情のあらしとなって
消えてゆく。中也の詩がこうい
う詠まれ方しかないとしたら異
論が出るだろうが、「歌謡の復
権・肉声の回復」を心がける福
島氏の熱情は伝わってくる。何
までも中也の出立ちにせうけりな
のだ。

若いころ中也の友だった吉田
秀和氏の証言では「中原はだみ
声だけれど、耳がよくて、拍子
はずれではなかったし、二オク

ターウ声が出るという自慢の歌」とある。
「(略)歌といえは、中
原は、よくウエルレーヌやラン
ボアの詩を、ふしをうけて朗読
世の詩にふさわしいというほか
してくれだ……」(「プロモ
ン」)。 (兼 哲郎編集委員)